

## コータンのユダヤ・ソグド商人？<sup>(1)</sup>

吉 田 豊

はじめに

敦煌とトルファン出土の漢文文献をテーマにする本書に、コータンに関するテーマで、しかも漢文文献を扱わない論文を寄稿することには気が引ける。しかし現在の日本や中国では「敦煌・吐魯番學」は「シルクロード學」とほぼ同義であるので、許していただけるかと思う。

21世紀になってから、中国ではコータン出土の種々の文書が紹介されている。新発見のもの他に、以前に発見されていたものが再発見されたものもあるようだが、筆者には詳細は分からない。これらの新しい文献に関してはすでに多くの論文が発表されており、それらすべてをトレースすることも容易ではないが、本稿ではそれらの内のユダヤ・ペルシア語<sup>(2)</sup>の手紙とソグド語の世俗文書の解釈についていくらか論じてみたい。

### 1 コータンのソグド人と商人

これら一連の「新出」文書が発見される以前、コータンで活動していたソグド人については、その当時知られていた史料を使ったÉ. de la Vaissièreの研究がよくまとまっている<sup>(3)</sup>。最も早い史料は西暦300年頃と考えられるエンデレ出土のカローシュティー文字の契約文書で、Khotana maharaya rayatiraya hinajha Vij'ida Simha「コータンの大王、王中の王、元帥 Vij'ida Simha」の紀年がある。これはラクダの賣買契約であるが、購入者も証人もソグド人である (cf. de la Vaissière, *op. cit.*, p.58)。ただし、これ以降唐代までコータンにおけるソグド商人の活動に関しては、直接それを示す史料が見つかっておらず、de la Vaissièreは、西域北道での活動がこの時期の主流で、南道の重要性は相対的に少なくなったとする (cf. *op. cit.*, p.125)。ちなみに、直接的にソグド人の存在を示唆するのは8～9世紀のコータン出土のソグド語文献である。従来は少数の断片類が見つかったに過ぎないが<sup>(4)</sup>、近年はまとまった量の文献が見つかるようで、一部が最近になって発表された<sup>(5)</sup>。

唐代前半の敦煌やトルファンの場合、定住して戸籍に組み込まれるソグド人と、戸籍に登録されないものの「興胡」として受け入れられ商業活動を行うソグド人の2種類があった<sup>(6)</sup>。前者の例としては、敦煌の従化郷の差科簿やトルファンの崇化郷の點籍様に登録されたソグド人がよく知られている。唐の時代の興胡について、荒川正晴は「…彼らは唐内地で「百姓」「行客」「別奏」となっていた同族と連携しながら、過

所を取得して活発に交易活動を展開していたと考えられる」としている(荒川『前掲書』p.369)。興胡と呼ばれるソグド人が一様に漢字の姓を持つことは注目される。彼らも唐政府の管理下に入っていたと考えられるからである。

コータンの場合、コータンで作成されたコータン語及び漢語・コータン語の二言語併記の納税者名簿にソグド人の名前が登録されている事例が見つかる。現在龍谷大学に保管されている大谷探検隊将来資料には budävamḍai が見える。これはソグド語の人名 \*pwtyβntk 「(原義) 佛陀のしもべ」に対応する。ただしこの名前自體がソグド文字で表記された例は知られていない (cf. BSOAS 60/3, 1997, p.569)。最近紹介された二言語併記の納税者名簿 (X-15) には失飯臺 sirvamḍai が見える<sup>(7)</sup>。これもソグド文字表記では存在が証明されないが、\*šyrβntk 「良きしもべ」に対応するのであろう<sup>(8)</sup>。この二つの人名は、基本的にはコータン人の人名のリストの中にわずかに例外的に見えているものであり、従化郷や崇化郷のようにソグド人が集住していたようには見えない。

ところが、このX-15の発見により、漢語の「村」に対応するコータン語の単語 bisā- の存在が確認されることになった。そして従来ソグドと関連づけられてきたコータン語の sūli と bisā- の組み合わせ sūli bisā も改めて確認された<sup>(9)</sup>。その表現が現れる文書は、Or. 12637/23 (M.T.0463) の編號で大英図書館に保管されており、P. O. Skjærvø によるテキストと翻譯が発表されている<sup>(10)</sup>。ただそこで彼が M.T. を Mazar Tagh の略語と考えるのはおそらく誤りで、ドモコ地区の Mazar Toghrak 出土であろう。マザール・ターグ (Mazar Tagh) は沙漠にそびえる丘に設けられた要塞であり、コータン人が定住していたとは考えられない。本文書が税錢や布帛の徴収に係わる記録であることも、出土地についてのこの推測を支持するであろう。残念ながら本文書は破損していて文脈が分からないため、この「ソグド人村」の實態は不明である。ただX-15から判断すれば、コータンの bisā- 「村」の規模は小さく、最小では2戸、最大でも10数戸であったようだ。この種のソグド人が集住する村落は、バクトリアにもあったようで、βονοσογιλιγο [bunsuglig] “Sogdian settlement” という表現が、693年にグーズガンで書かれたバクトリア語文書に見つかる<sup>(11)</sup>。

コータンで見つかる漢文文書では、マザール・ターグにあった神山館・神山堡との関連で、そこに軍物を納入したソグド人の商人が現れる(荒川『前掲書』pp.319, 368)。そのうち羅勃帝芬は善政坊在住とされており、彼はコータンの納税者名簿に登録されていたと考えられる。もう一人は別奏の康雲漢で、彼と彼の作人や奴隸は唐の駐屯軍に属していたようだ。この種のソグド人とコータンで出土するソグド語文書との関連は今のところ明らかではない<sup>(12)</sup>。

一方コータンで出土する8世紀後半から9世紀初めにかけてのコータン語文書に、税錢との関係で商人 (hārū) が言及される例が知られている。筆者の研究から引用する<sup>(13)</sup>：

また税錢の徴収や運搬を、商人が行っているように見える事例もあるが詳細はわからない。例えば Hedin 16 では、税錢3000錢を、商人 (hārū) の Rašade が領收したとある。集められた税錢を商人たちが取り扱っていたらしいことは、Or. 6394/1 (Skjærvø 2002, p.5) から窺われる。そこでは šsau Phvaimhvuhī が期日までに布を納入しなかった Sidaka と彼の人民に対して命令しているが、問題の布を hārū の Sāmade と Harttākam が立て替えたらしく、その辨済を要求している彼らに金利と共に錢で支拂えと書かれてある。税を立て替えて金利を得る、高利貸し商人の姿が見え隠れする。

この種の税錢はむろん銅錢であり、その量は数千を超えることがしばしばである。その場合は、漢文では1000錢を意味する「貫文」を使うが、それに對應するコータン語は ysā'cya であることが知られている、cf. 吉田『前掲書』p.104。ここに言及されている商人 (hārū) たちの民族性は分からない。ただコータン出土のソグド語文獻に、pny 「銅錢」関係の文書が見つかること、さらにそのなかには ptkwk 「貫文」に言及するものもあることは注目される<sup>(14)</sup>。つまり、コータン地区で活動していたソグド人を始めとする商人は、大量の銅錢を運用していたらしいことが推測される。この推測は、近年発表されたコータン出土のユダヤ・ペルシア語の手紙とソグド語の世俗文獻からも確認される。本稿では、このユダヤ・ペルシア語の手紙とソグド語文獻を検討することによって、コータン語文書や漢文文書からは分からなかった、コータンにおけるソグド人や商人の具体的な活動を見ようとするものである。

## 2 本稿で扱う新出のユダヤ・ペルシア語の手紙文とソグド語文書

2004年に中國國家圖書館は、コータン地区で発見された一群の寫本を入手したが、その中にユダヤ・ペルシア語の手紙があった。X-19の編號が付けられたこの文書についての研究論文は早くも2008年に、圖版とともに発表された(張滸・時光「一件新發現猶太波斯語信割的斷代與釋讀」『敦煌吐魯番研究』第11卷、2008 [2009], pp.71-99)。文書は縦40cm、横28cmで、文書の後半にわずかな破損があることを除けば、ほぼ完全に残っている<sup>(15)</sup>。ヘブライ文字で書かれたテキストの全体の行数は38行であるが、36行目以降は残されたスペースの関係で、左下がりの行の行末は紙の左端に届くまえに下端に達して、そこで次の行に移る。内容から判断して、最終の38行目での手紙は終わっていないので、次の料紙に續きは書かれていたようである。つまりこの手紙は完結していない。

ところで、今回のユダヤ・ペルシア語の手紙文書の発見よりほぼ100年前、A. Stein は同じ形態のユダヤ・ペルシア語の手紙をダングンウイリク遺跡で入手していた。実際には彼が発掘に立ち會ったのではなく、彼が現場を立ち去った後で残された人夫たちが発見したものであった。縦は40cmで同じだが両端が著しく破損しており、38行が残っているものの、各行の3分の1から2分の1ほどしか文章を回収することがで

きず、文脈を想定することは容易ではない。以前に発見されていたこの手紙（以下「手紙1」と略す）と今回発見された手紙（以下「手紙2」と略す）の内容を比較した張・時は、書體と正書法、手紙に登場する人名が3名まで一致すること、どちらの手紙でも羊の賣買が問題になっている点で内容面でも無関係ではないことから、「兩手稿出自同一時代同一地區、且有可能出自同一人之手」と結論している (cf. art. cit., p.79)。張・時は、手紙1では、手紙の挨拶の部分が読み取れるとする。しかしながら、手紙2に完存する書き出しの書式と比べると、一致する表現は見当たらないので、手紙1は途中から始まっていて、書き出しの部分は失われていることになる<sup>(16)</sup>。その一方で手紙2では、本文が途中で終わっていることから、手紙1が手紙2に後続することも十分にあり得るのではないだろうか。

手紙1が発掘されたダンダンウイリクからは8世紀終わりの漢文文書が発見され、それより遅い文書は見つからないので、その頃にこの聚落は放棄されたと考えられる。それ故、手紙1も同じように8世紀終わり頃の文書と考えられてきた。下でも見るように手紙2には、カシュガルでチベット人が「きれいさっぱり殺された」ことが記されている。筆者はかつて、カラバルガスン碑文の記事とコータン出土のコータン語文書を検討することによって、798年にチベット軍はクチャ付近でウイグル軍から壊滅的な打撃を受けたこと、802年にカシュガルがウイグルに陥落したことを明らかにした<sup>(17)</sup>。張・時は、Skjærvøからの示唆により、手紙2に記載された事件と、筆者が推定する802年の事件を結びつけた。手紙2においてカシュガルのチベット人が全滅したことが言及されるのは、8世紀終わりから9世紀初めにかけての、ウイグルとチベットによる中央アジアの覇権をめぐる熾烈な戦いが背景であることは間違いない。従ってこの年代比定はおおむね首肯できる。ただ偶然見つかった文書に見つかる記事どうしを、にわかに関係づけることができるかどうかは慎重に判断しなければならないであろう。

なお、手紙1と2はダンダンウイリクで発見されたいので、受取人はそこに滞在していたと考えることができよう。また手紙の冒頭の6行目には、Nürbakなる者がkwtn「コータン」に便りを持って来たことが記されているから、差出人はコータンの王城にいたのであろう。当時の王城は現在のヨートカンにあり、手紙2の発見地のダンダンウイリクから直線でおおよそ150キロメートル南西にあるから、手紙によって連絡を取り合っていたのであろう。料紙が同時代の中国紙であるとする指摘 (張・時, p.75) も、この推定と矛盾しない。

一方、ソグド語文書のほうは、2010年に北京の民族大學博物館に入った、コータン出土の文書群 (漢文、コータン語、ソグド語、チベット語) に含まれているもので<sup>(18)</sup>、全部で12点であるという。12点の内、手紙ではない4点の文書がBi Bo and Sims-Williams, art. cit.によって発表されている。彼らによれば、これらの文書の出土地は明らかではないと言う。またコータン地區におけるソグド人の活動をめぐる歴史

的な背景を考慮すれば、これらの文書は他の漢文およびコータン語文書と同様8~9世紀に比定されるだろうと言う。

これらの文書は世俗文獻に特有の難解さを伴い、筆者は既に発表されている読み全體を大幅に改善することはできないので、本稿では特に訂正したり改善したりすることができる部分のみを扱う。ユダヤ・ペルシア語の手紙1と手紙2については、現在発表されている翻譯を末尾に附録として添えた。ソグド語のほうは断片類であり、本稿に関連する文書以外はここでは引用しないことにする。

### 3 (p)nb'sy「兵馬使」と他の漢語の要素

手紙2の30-31行目にはカシュガルでチベット人が殺されたことが報告されている：

(30) 'g'hy 'y q'sgr yn hst qw twpyty'n r' p'q by qwštn

[āgāhī i kāšgar in hast kū tūpityān rā pāk bi kuštan(d)]<sup>(19)</sup>

「カシュガルに関する知らせはこの通りです：彼らはチベット人たちをきれいさっぱり殺しました」<sup>(20)</sup>

上でも述べたように、張・時はこの部分を、筆者の研究を参考にして、ウイグル人がカシュガルを制した802年の事件に結びつけたのであった。直後に続くw-bgdw bstn「そしてbgdwを束縛した (制限を加えた?)」は、bgdwの意味がわからないために内容が明らかではない。それに続くのは次の文である：

(31) ... w-sb'pwšy šwd (32) [p'] q'sgr 'b' p' sd mrd cy sw'r wcy py'dh [u-sibāpuši šud pa Kāšgar abā pā(n)-sad mrd čī savār u-či piyāda]

L. Paulは「そして副司令官は100人とともにカシュガルに行ったが、ある者は騎兵、またある者は歩兵であった」と譯している<sup>(21)</sup>。ただ張・時はSkjærvøからの教示を得て、p' sdを正しく[pā(n)sad]「五百」を意味する形式と理解した。彼らはPaulがmenと翻譯するmrdを譯していない。實際この語は他に知られていないようだが、文脈から兵士に類した人を表す語であったらしいことは確認できる<sup>(22)</sup>。おそらく500人からなる騎兵と歩兵が、ウイグル軍(?)の進軍を防ぐためにカシュガルに派遣されたのであろう。ただウイグル軍はこの時にコータンに進軍する事はなかったらしい。カラバルガスン碑文の漢文版の21行目は、次のように讀める：

(缺損) 攻伐葛祿・吐蕃、擐旗斬馘。追奔逐北、西至拔賀那國。(剋) 獲人民、及其畜産。葉護爲不受教令、離其土壤。(以後缺損)<sup>(23)</sup>

「逃走する葛祿と吐蕃を追撃し、西して拔賀那國に至る (追奔逐北、西至拔賀那國)」

とある。東からフェルガナに進軍しているので、カシュガル方面から追撃したことが推定されるだろう。つまり802年にあったカシュガルでの對チベット戦での勝利の後、ウイグルはフェルガナ方面に進軍したようだ。

ここで問題にしたいのはこれに続く部分である：

(32) ... w-sbs 'y sb'pwšy [hb] (33) ... nb'sy hrb r' w-sl'm w-kzym r' bysp'n

prstyd [u-sibas i sibāpuši ... nb'šy harb rā u-salām u-xazīm rā bayaspān firistid]

張・時はこの部分を「軍副使之後 … nb'šy 爲了戰鬥、爲了和平和勝利派出了使者」と翻譯している。32行目の最後の語は確かに hb と讀めるが、明らかに書き手は2番目の文字を書き直そうとして上から書き足している。書き手がどの文字を書こうとしたか判然としないが、筆者には hm 「また」のように見える。33行目の冒頭は破損しているが、脱落しているのは1文字分である。しかもその文字の左側の残畫がわずかに見えていて、筆者は p の左下の部分であるように見える。pnb'šy という語は、同時代のコータン語文書に現れる pem'ba'šī とあまりにもよく似ていて、無関係とは考えにくい。このコータン語の單語は IOL Khot Wood 3 に在證され、筆者は「兵馬使」に比定した<sup>(24)</sup>。戦争と派兵に関する手紙2の文脈もこの比定を支持するであろう。改善した讀みと翻譯は以下の通りである：

(32) ... w-sbs 'y sb'pwšy hm (33) (p)nb'šy hrb r' w-sl'm w-kzym r' bysp'n prstyd

「軍副使の後で兵馬使も、戦争および和平と敗走<sup>(25)</sup>のために使者を派遣した。」注意すべきは、「兵馬使」という肩書は漢語であり、この稱號を帯びていたのは漢人であった可能性があることである。もしそうであれば、この段階でコータンはまだチベットの支配下に入っていなかった可能性がある<sup>(26)</sup>。

張・時はさらにまた Skjærvø の提案を採用して sb'pwšy [sibāpuši] を近世ペルシア語の sipāh 「軍隊」と漢語の「副使」の複合語と見なし「軍副使」と翻譯している。その Skjærvø はこの pwšy を、マニ文字で書かれたマニ教文獻である Mahrnāmag に現れる fwšyy と同じ要素だと考えた<sup>(27)</sup>。これは正しい比定であり、ヘブライ文字で書かれた pwšy の發音は、張・時の推定する [puši] ではなく [fuši] であっただろう。ちなみに西暦800年頃には中國語の輕唇音化は確實に完了している。Mahrnāmag に見られる fwšy の例は、[twp' fwšyy (70), 'wltw (sic 'wltwy の誤寫) fwšy (94), t'ng fwšyy (94-95), l'fwšyy (95) である。後の2つは「唐副使」と「羅副使」に對應していて、副使の前には漢語の姓が立つ。残りの二つの場合はトルコ語の名前の要素であろう。漢語の「副使」の前にはこのように名前の要素が立つか、「節度副使」のように稱號が立つので、sb'pwšy の sb' も漢語の姓である「司馬\*si ma」とみなすべきかもしれない<sup>(28)</sup>。「馬」の聲母が脱鼻音化していることは上でみた pem'ba'šī 「兵馬使」の例から確實だが、「司馬」の發音の表記としては sb' ではなく \*syb' が期待され、この比定も確實ではない。いずれにせよ、「軍隊」を意味するペルシア語の單語と漢語の「副使」の組み合わせは不自然なように思われる。

ここでこの手紙2で見つかる漢語の要素を見ておくことにする。副使を除けば張・時が提示するのは以下の3語である：

šg (ll. 14, 15) < 石 (液量の單位)

šmsy (l. 16) < 蠶絲

pnkw'n (l. 17) < 判官

このうち「石」と「判官」は榮新江の比定であるという (cf. 張・時, art. cit., pp.93-94)。最近になって畢波はさらに qynq'k (ll. 28, 29) を「筋脚」に比定した。筋脚は、コータンで出土する唐の時代の漢文文書に現れ、日本語の「飛脚」のような意味を持っていたという<sup>(29)</sup>。

ところで張・時が「蠶絲」に当たるとする šmsy は、次のような文脈に現れる：

(15) ... 'z mr syky r' yqy (16) prny'n wyqy šmsy hydyh [az mar syky rā yakē parniyān u-yakē šamsī hidya]

これを張・時は「給 syky 的禮物是：一份絲綢一份蠶絲」と翻譯している。しかしながら Karlgren の復元する「蠶絲」の中古音は \*dz'ām si であり、初頭の [dz'] は當時無聲化して [ts] と發音されていたと考えられるから、šmsy と綴られることは考えにくい。近世ペルシア語の parniyān は “a kind of fine painted China silk; also garments made of it” を意味する<sup>(30)</sup>。従って syky と呼ばれる高官に賄賂のような贈り物として與えられたのは、布地ではなく絹絲で織られた衣服でもありえる。そうすれば、šmsy のほうも絹絲のような素材ではなく、服飾品を意味していた可能性が高い。實際ソグド語には漢語から借用された š'mtsy [šamtsi] 「衫子」が在證されている<sup>(31)</sup>。外来音である [ts] は不安定で、[šamsi] とも發音されていたのであろう。實際、ウイグル語の寫本には šamsī という形式が見られる (cf. Sims-Williams and Hamilton, ibid.)。

pnb'šy と pwšy 同様に -šy で終わる不明語には cykšy (12) ~ cyk'šy (11, 16) がある。

(11) wmr cyk'šy r' prmw d qw zwd gwspnd yn swgdy by dyh

[u-mar cyk'šy rā farmūd kū : zūd gōspand in sugdī bi dih]

「就命令 cyk'šy 道：快把這個粟特人的羊交出來！」<sup>(32)</sup>

これも「使」ないしは同音の漢字で終わる漢語の稱號であった可能性が高い。實際 Mahrnāmag には、非常によく似た形式の cygšyy が見つかる<sup>(33)</sup>。これは漢語の「刺史 (\*ts'jak ši)」に由来し、文脈から期待される稱號である。ただ cykšy はともかく、cyk'šy のほうは發音の面で必ずしも一致しないので、當面この比定は推測の域を出ない。

#### 4 bgydy とソグド語の要素

手紙1に2つのソグド語の單語があることを指摘したのは W. B. Henning であった。それらは cmkwy (Sogd. cmxwy) 「ハーブ」と 'ndryk (Sogd. 'ntr'yk) 「宦官」であった<sup>(34)</sup>。手紙2にはさらに2つのソグド語の要素が存在していることが指摘された。それらは、曆上の日を表す sgd (Sogd. syt-) 「～日」と、ペルシア語の基数詞から序数詞を派生する接尾辭 -my 「～番 (目)」である (šš-my mh p' dh sgd [šaš-mi mäh pa dah sagd] 「6月10日」。cf. 張・時, art. cit., pp.92-93<sup>(35)</sup>)。Bi Bo and Sims-Williams

はその後さらに、お金を数える単位である ptkw が、コータン出土のソグド語文獻に見られる ptkwk からの借用語であることを明らかにした (cf. art. cit., pp.506-507)。彼らは、ptkwk は ptkwc 「穴を開ける、穿つ」から派生した名詞で、漢語の「貫」のカルクであるとする。

手紙1で cmkwy が現れる文脈を見てみると、そこには意味の分からない bgydy という語が含まれている。張・時 (art. cit., p.94) は、この語は手紙2の bgdw と同じ語で、実際には bgydw と読むべきであるとする。しかし発表されている手紙1の寫真で確認すると、bgydw の読みは不可能で、確かに bgydy と読める。下に手紙1の当該部分の Bo Utas のテキストと翻譯を引用する：

24 [ ](.)r' sb'bd ydwn qw(py)d qw mr' cmkwy yqy (.)[ ]  
 25 [ ](c)mkwy 'ry mn qnyzq r' 'mwzwm wend cwst[ ]  
 26 [ ](.)bh byndwm n' b(yn)d'dwm by '(z) nwrby qy (c)[mkwy ]  
 27 [ ](.)d dhwm t' bgydy r' by 'mwzd 'ndryq 'y sy(')[h ]

“[... regarding that matter] you will say to the commander (?): [Bring] me a harp [and I have a girl! If] you bring the harp, I shall teach the girl, and look how fast [she will learn! What] I [wanted to] find, I did not find, but from \*Nūrbak [I got] one ha[rp, and that one] I shall give to him, so that he shall teach \*Bagīdī. The black eunuch(?) [will take care of the rest].”<sup>(36)</sup>

張・時は bgdw は、人間の種類を意味する語であるとするが、それは手紙1の bgydy と同じ語と考えるからで、手紙2の文脈を見れば、gnd 「砂糖」や意味不明の lymcw などと同様に、贈り物（あるいは賄賂）として人に手渡されるものであることが分かる：(20) ... šb'n'n r' bgdw wgn d wlymcw hdyh [šubānān rā bgdw u gand u-lymcw hidya] 「給牧羊人的禮物は：bgdw、糖和 lymcw」。従って、贈り物になる物品の bgdw と、ハーブを教えられるような人間を表す bgydy は別の語と見なさなければならない。筆者は Utas と同様に bgydy を人名と解釋する。そして、ソグド語の人名 βyyδ'y 「(原義) Mithra 神の女奴隸」であると見なす。この人名は、Mahmāmag の134行目に実際に在證されている (cf. Durkin-Meisterernst, *op. cit.*, p.107b)。

それではなぜこの手紙の一節で、ソグド人の少女にハーブの演奏を教えることが問題になっているのであろうか。これにはトルファンのアスターナで出土した則天武后時代の漢文文書で、中國の研究者が「先漏新附部曲客女奴婢名籍」と題したものが参考になる。ここでは、この文書についての吳震の研究成果を分かりやすくまとめた森安孝夫の著書から、やや長くなるが関連する部分を引用する<sup>(37)</sup>：

吳震の分析によれば、この「奴婢名籍」には二軒の家の戸籍に所屬すべき私賤民が合計で79名記載されているが、文書の破損状態からみて元來は100名以上いたはずであり、しかもこれらすべては前回の戸口調査の時には漏れていたもので、今回新たに戸籍に載せるように申告するものである。(中略)

本リスト中には、建て前上は人身賣買されない半自由民の樂事・部曲・客女も見えるが、壓倒的多数は所有者が自由に賣買できる私奴婢である。その数は68人(奴23人、婢45人)、その内で年齢の判明する者は、10歳未満が9人(奴3人、婢6人)、10代が18人(奴6人、婢12人)、20代が10人(奴2人、婢8人)、30代が7人(奴5人、婢2人)である。(中略) たった二つの家族に、これだけ大量の奴婢がいること自體いかにも不自然であるが、それが前回の人口調査の時には申告されなくて、ここでいきなり出現したのであるから不自然さは倍加する。

しかも奴婢の中に1歳から13歳までの幼少の者が二割近くも含まれており、勞働力として使役するために購入したものではないことは明らかである。さらに奴婢の名前をチェックすると、なんと少なく見積もってもその五割以上が漢語とは思われない、つまり胡名の音寫なのである。(中略)

奴婢は姓がないため、胡名だからといってそれをソグド語・ソグド人と即断するわけにはいかないが、姓を持つ部曲・客女9名のうち4名がソグド姓であるから、やはり半数以上はソグド人であったといっても過言ではないだろう。(中略) 残念ながらこれらの賤民を保持した二軒の家の戸主が漢人であったか、それともソグド人ないし西域人であったか、姓名ともに残存しないのでわからないが、たぶんソグド人であったとみてよかろう。

以上より吳震は、これらの賤民たちは、前回の人口調査以降(戸口調査は3年ごとである)にあらたに蓄積された特殊な商品、すなわち販賣用の奴隸であり、商品として付加価値を高めるため、ここトルファンの地で漢語や漢人の禮儀作法を習い、さらには歌舞音楽その他の技藝の訓練さえ受けていたのであろう、と推測する。客女6名のうち2名が60歳代、1名が49歳と高齢であるのは、奴婢の教育係であったと見るのが妥当であろう。

このように大量の人口が戸主の本據である家で同居するはずもなく、文書中に「寄莊處」とあるごとく、本據地以外の別莊なり、寄宿舎のようなところがあったにちがいない。まさに奴隸育成施設である。ちなみに、時代は10世紀まで降るが、イブン=ハウカルによれば、サーマーン朝治下のサマルカンドはトランスオクシアナ中の奴隸の集まる所であり、しかもサマルカンドで教育を受けた奴隸が最良であるという。ソグド商人には、購入した奴隸に教育を施してから高く賣りさばくという傳統があったと思われる。

このようにソグド人の奴隸を教育することは実際に行われていたのであり、ここでもハーブを教えられたのは女奴隸であったと推測することは許されるであろう。直後に現れる 'ndryq 'y sy(')[h 「黒い宦官」もその教育にあたったということも考えられよう<sup>(38)</sup>。

この手紙の言語に借用されたソグド語の要素に、序数詞を形成する接尾辭 -my が含まれていることは注目し得る。このような文法的な拘束形態素の借用は、單なる



語彙の借用に比べればより密接な言語接觸を想定させる。言い換えれば、この手紙を書いた商人はソグド語とペルシア語のバイリンガルであった可能性が高い。それでは他にも二つの言語の接觸を想定させる要素はあるであろうか。筆者は手紙1と手紙2に3度証される、動詞 *farmāy-*「命令する」の2人称単数の命令形と不定詞との組み合わせも、ソグド語の影響によるものではないかと考える。ソグド語では動詞 *framāy-*「命令する」の2人称単数の命令形と過去不定詞との組み合わせが、「～して下さい」を意味する敬語として使われることが知られている：(例) *prm'y 'PZYmy 'wn'kw wyδβ'γ 'krty*「私にその説明をなさして下さい」<sup>(39)</sup>。以下にその例をリストする：

手紙1, l. 4: *-yš by prmy d'dn [-iš bi farmāy dādan]*「どうかそれを下さい」<sup>(40)</sup>

手紙1, l. 32: *wkwd 'z 'n swy kw'st'ry prmy qrdn [u xud az ān sōy xvāstār-ē farmāy kardan]*「それに関してはお自分で依頼なさして下さい」<sup>(41)</sup>

手紙2, l. 24: *'š by prmy d'dn [-aš bi farmāy dādan]*「どうか(それを)彼女にあげて下さい」<sup>(42)</sup>

假に筆者が推定するように手紙の書き手がペルシア語とソグド語のバイリンガルであったとすれば、彼にとってペルシア語とソグド語のどちらが母語(あるいはより堪能な言語)だったのであろうか。彼が書くペルシア語にソグド語の基礎語彙や接尾辭が現れているという状況から、ペルシア語が第2言語であったことが示唆される<sup>(43)</sup>。この推定は手紙2でコータンの *dihgān* が、手紙の書き手のことを「ソグド人」と呼んでいることから支持されるだろう。前節で引用した文を再び引用する：

(11) *wmr cyk'sy r' prmwd qw zwd gwspnd yn swgdy by dyh*

*[u-mar cyk'sy rā farmūd kū: zūd gōspand in sugdī bi dih]*

「就命令 *cyk'sy* 道: 快把這個粟特人的羊交出來!」

「He ordered (to) *Jixāši*, 'Quickly give this Sogdian the sheep!」<sup>(44)</sup>

ちなみに、V. Hansenはこのパッセージに関して、シルクロード上にあまりに多くのソグド商人がいたので、*dihgān* はこのユダヤ商人もソグド商人だと誤解していたのだとするが、いかがなものであろうか<sup>(45)</sup>。

## 5 コータン出土のソグド語文書との関係

このユダヤ・ペルシア語の手紙の書き手がソグド語を母語としていたとするなら、彼や彼の仲間たちはソグド語でも読み書きしていたであろうか。しかしもし萬が一、彼ら書いたソグド語文書があったとしても、現在わずかに残っているコータン出土のソグド語文書にそれを見つけることは不可能のように思われる。ただこのことと関連して筆者は、上でも言及した Bi Bo and Sims-Williams が最近発表したソグド語文書に注意を喚起しておきたい。

手紙2の冒頭は次のような語句で始まっている：

(1) *pnn'm zydy kwdh yqrbqr [pannām izid xudah i-kirbakar]*

「以仁慈的神主之名」

この冒頭にある「神の名前において」に對應するソグド語の表現は *pr βyy n'm* になるはずだが、この表現は確かに存在する。従来2例確認されているが、どちらも遅い時代の敦煌出土文書である。その2点の文書を発表した Sims-Williams and Hamilton (*op. cit.*, pp.39-40) は、このソグド語の表現あるいは定型句の背景にある宗教は一神教で、この時代に考え得るのはキリスト教かイスラム教だとした。手紙2の発見により、さらにユダヤ教徒もこの定型句を使っていた可能性があることが判明した<sup>(46)</sup>。

Bi Bo and Sims-Williams が発表したソグド語文書のなかに、実際にこの定型句が現れることは極めて興味深い。二人の著者は当該の部分の正しく読んでいないと思うので、ここで筆者のテキストと翻譯を提出する。当該の文書は GXW 0434 という編號で民族大學博物館に收藏されている。その文書の裏側(?)に他の文とは天地を逆にして次の2行が書かれていた：<sup>(47)</sup>

1 [ *pr βyy n'm 'sty lLpw ptk(w)k pny xyδ pny pr*

2 [ *pcy'zδ ZY šyr'krtyh s'r zy'mt k'n*

「…(日付?)… 神の名において。銅銭が1000貫ある。あなたがたは、この錢を…の爲に受け取れ。そうすれば彼は(それを)善行の爲に支出するであろう。」<sup>(48)</sup>

この文書はユダヤ教徒が書いたのであろうか。残念ながらそのことを証明することも否定することもできない。にもかかわらずここに言及された多量の錢(1,000,000錢)は手紙2で言及される100貫の銅銭との関連を疑わせる：

(33) ... *wmn hrb r' cyz* (34) *d'dwm p' m'yh 'y sd ptqw pšyz*

*[u-man harb rā čiz dādum pa māya i sad ptkw pašiz]*

「我爲了戰鬥付了100 *ptkw* (=貫) 錢」<sup>(49)</sup>

証明はもとよりできないが、筆者はこのソグド語の文言と、手紙2の文言が何らかの関連があるのではないかと思えてならない。戦争のために資金を提供することが、商人には *šyr'krtyh*「善行」に思えたのではなかろうか。

ここで推定したように手紙1や手紙2の書き手がペルシア語も使えるソグド人であったとすると、そのことはこの時期に、ソグド地域がペルシア語化する過程にあったことを示すのかという疑問がわく。ソグドの都市部では10世紀には確實にペルシア語化していたのである<sup>(50)</sup>。ただこの問題は本論文で扱うには複雑すぎて筆者の手に餘る。ここではそのことを指摘するにとどめる。

## 6 手紙2の *dihgān* は誰か?

手紙2は、政治史的な観点からも興味深い問題を提示する。その内の一つは手紙の中で *dihgān* と呼ばれている人間が誰なのかという問題である。張・時はこの語を「地主」と譯しているが、これはこの單語の原義に過ぎない。近世ペルシア語の *dihgān*/

dehqān の具体的な意味については A. Taffazoli が詳しく論じているが、その彼は以下のように述べている：

“It may be inferred from various reports that in early Islamic times some *dehqāns* functioned almost as local rulers, especially in eastern Persia, and that any man of wealth or social prestige might thus be called *dehqān*.” (cf. *Encyclopaedia Iranica*, Vol. VII, New York, 1994, pp.223-225)

実際、8世紀の初めのベンジケント王であった Dēwāštīč をタバリーは dihgān と呼んでいる<sup>(51)</sup>。確かに手紙2では、dihgān はコータン人たちのトップであり、手紙の書き手の最大の関心事の一つである羊の獲得の件では、最も重要な役割を果たしているように書いてある。例えば、上で引用した11行目の記事から、dihgān は、cyk'sy (= 刺史?) に羊を與えるように命令できる立場にあったことが分かる。商人たちが、コータン人たちに提供した贈り物(賄賂)の量や価値を見てみると dihgān が圧倒的に多い<sup>(52)</sup>。

1. dyhg'n : (14) yqy gwlyq wyq qpyz qbr wpnc šg (15) dwgbyk wyq šg dmbyr wyq styr bwy 'y cyny hdyh [yakē gulik u-yak kafiz kabar u-panj šag dwgbyk u-yak šag dmbyr u-yak satēr būi i čini hidya]
2. syky : (15) yqy (16) prny'n wyqy šmsy hdyh [yakē parniyān u-yakē šamsi hidya]
3. syky cyk'sy : (17) yqy prny'n wdw gnd wdw lymcw hdyh [yakē parniyān u-du gand u-du lymcw hidya]
4. yq pnkw'n : (18) yqy lyqyn wyqy gnd yqy lymcw hdyh [yakē lyqyn u-yakē gand yakē lymcw hidya]
5. dw mrnd : (19) yq yq lyqyn wyq yq gnd wd lymcw hdyh [yak yak lyqyn u-yak yak gand u-du lymcw hidya]
6. šb'n'n : (20) bgdw wgnđ wlymcw hdyh [bgdw u-gand u-lymcw hidya]

dihgān への贈り物は、甕が1つ、1 kafiz のセイヨウチョウボク(薬物)、5石の dwgbyk、1石の dmbyr、1サテルの重さの中國香料(ムスクか)であるのに對して、その次に記された syky (意味不明; 何らかの稱號か) の場合は、上記の3節で述べたように、parniyān と呼ばれる衣服1着と衫子が1着に過ぎない<sup>(53)</sup>。ここで興味深いのは、gnd と呼ばれる「砂糖、お菓子」である。これはソグド人たちが扱っていた商品で、漢文文献で「石蜜」と呼ばれるものに違いない<sup>(54)</sup>。

これらの人々の内の4番目は yq pnkw'n 'y br gwspnd mhytr 「掌管羊的判官」であるが、この「判官」という稱號は決して低い稱號ではない。Mahnāmag では p'nxw'n とし表れ、同時代のコータン語文書でも phamñā kvamñā と表記される。漢語とコータン語のバイリンガル文書で、798年に書かれた Hedin 24 では判官の富惟勤がコータン皇帝の命令書を書いている。その同じ富惟勤は、ドモコ地區で紬の徴収を管理して

いて、801-802年の文書である Hedin 15, 16 に署名している<sup>(55)</sup>。

手紙2には dihgān の娘も言及されている。書き手の考えでは、dihgān の好意を得るには、この娘にも大いに配慮する必要があった。dihgān にとってこの娘は目に入れても痛くなかったようだ。以下のように手紙では書かれている：<sup>(56)</sup>

(25) [twr] (')<sup>(57)</sup> cyšm wrwšny'y hm yn dwktr hst dyhg'n r' wskt sb's qwn  
[turā čišm u-rōšni-ē ham in duxtar hast dihgān rā. u-saxt sibās kun]

(26) [wg]r sb's 'y wr' qwny cyz gwm n' bwd ...

[u-agar sibās i varā kunē čiz gum na buvad ...]

「あなたにとっての目と光のようなものが、dyhg'n にとっての娘なのです。大いに感謝の氣持を示しなさい。彼女に感謝しても損はありません」<sup>(58)</sup>

このように見てくると手紙2の dihgān は、コータン王かそれに匹敵する位の人間であったと推定することができる。いずれにしても彼は単なる「地主」であったとは考えられないだろう<sup>(59)</sup>。手紙のこの部分は、当時のコータン社會における社會階層や制度を考える上でも興味深い。そこに見られる稱號の順序は以下ようになる：dyhg'n (コータン王?) — syky (?) — syky cyk'sy (刺史?) — 羊を管理する pnkw'n (判官) — 羊を管理する mrnd (兵士、護衛?) — šb'n 「羊飼」<sup>(60)</sup>。手紙2ではコータンの王がペルシア語で dihgān と呼ばれていると考えたが、それとの関連でほぼ同時代の Mahnāmag で周邊のオアシス國家の支配者がどのような稱號を帯びているか見てもみよう：<sup>(61)</sup>

北庭 Bešbaliq = pnžyknōyy xwd'y (45-46)<sup>(62)</sup>

高昌 Qočo = cyn'ncknōyy xwd'y (55)

焉耆 Karashahr = 'rqcyk xwt'w (88-89)

シオルチュク Šorčuq<sup>(63)</sup> = 'wewrcyk xwt'w (110-111)

クチャ Kucha = 'kwcyk syrtwšyy (72-73)<sup>(64)</sup>

アクス Aqsu = prw'nc jβγw (77)

カシュガル Kashghar = k'sy xšyδ (75)

言語で見ると、中世ペルシア語 xwd'y 「王、主」、ソグド語 xwt'w 「王、主」、xšyδ 「王、帝王」、漢語 syrtwšyy 「(原義) 節度使」、チュルク語 jβγw 「葉護、ヤブグ」とまちまちである。節度使以外は、何がその背景にあったのか筆者には全く分からない。

むすびにかえて

破損の多い手紙1はもとより、ほぼ完全に残された手紙2でも多くの箇所の内容は把握できていない。ここで筆者が提案したことが、手紙の内容や歴史的背景の理解に少しでも貢献できればと切望する。むろん筆者自身、特に論文の後半部分で、証明も否定も出来ないという意味でやや大膽すぎる推測を行っていることは自覚している。

しかしその一方で、残された語句の字義通りの解釈や翻譯では、これらの手紙に含まれているかもしれない極めて重要な歴史的情報を回収できないことも事実である。ハーブの教育をめぐる議論はそのような例である。この時代とこの地域について、現在知られている状況を十分に理解した上で、想像をたくましくして行間を読み進めなければならない。そして、本文には現れないか、または現れたとしてもわずかにほのめかしてあるだけの、手紙の書き手と受取人の間で共有されていた背景知識をくみ取らなければならない。

手紙1の32行目にある prw'n を例にしてみよう。

(32) [...] p' prw'n wkwd 'z 'n swy kw'st'ry pmy qrdn [...]

[...pa parwān u-xud az ān sōy xwāstār-ē farmāy kardan ...]

「…Parwān に。そしてそれに関してはご自分で依頼なさって下さい…」

Utas は、前置詞 p' を伴う prw'n を地名だと認め、カーブルの北にあった Parvān と比較している<sup>(65)</sup>。しかしこの手紙が書かれた時代と地域を考慮すれば、これがアクスを指していたことは疑いがない。すぐ上で見たように当時アクスの王は prw'nc jβyw と呼ばれていた<sup>(66)</sup>。事実『新唐書』の「地理志」では、撥換（アクス）から神山（マザールターグ）を経由して于闐（コータン）に至るルートが記録されている<sup>(67)</sup>。

もう一つ例を挙げよう。この手紙を書いた商人は、手紙2の末尾で次のように書いている：

(36) 'gr 'mdh b'd p' q'sgr hr cnd kwzynth kw'hnd cyz b'z (37) m' m' d'ryd

[agar āmada bād pa Kāšyar har čand xuzīna xwāhand čiz bāz mā ma dārēd]

「もしも彼がカシュガルに来たら、彼らがどれほど多くの費用を要求しても、我々の方からは何も差し控えるな。」<sup>(68)</sup>

この文章はこの限りでは特に興味を惹かない。しかし、34行目で、カシュガルの戦争に係わって錢100貫を支出したことが記された後に書かれたこの文言が、戦争と和平に関して為された忠告であることを考慮すれば、手紙を書いた商人たちが、このチベットとウイグルの間の戦闘にきわめて積極的に關與しようとしていることが読み取れる<sup>(69)</sup>。いずれにしても、この商人たちは、V. Hansen が推定したような、取るに足らない少数の行商人のグループであったのでは決してない。それどころか、非常に大きなネットワークを作って交易活動を展開していたようだ。そのことは、手紙2の29行目に、一度に30通もの手紙を出したと言い、手紙1の2行目では20通以上の手紙を書いたと言っていることから容易に理解される。

本稿で筆者が展開してきた議論と推定が正しければ、西暦800年前後には、ソグド商人の中にはユダヤ教徒がいて、ベルシア語を使って仲間と交信しながらシルクロード上で相当規模の交易活動を行い、時に戦争にまで關與していたことになる。ソグドに移り住んだユダヤ教徒がソグド語化したのか<sup>(70)</sup>、あるいは、ソグド人がユダヤ教に改宗したことがあったのか、あったとしたらどのような経緯であったのかなどは現

在のところ全く不明である<sup>(71)</sup>。それについても新出の資料が近い将来公刊されて、このような疑問が一部でも解決できればと願うばかりである。

## 附録

手紙1 : Bo Utas の英譯 (注 (36) 参照)

- (1) *In the name of*] the Lord God who shall be [*our*] helper. Soon the day [*on which we have decided*
- (2) *will come* ; ] I wrote more [*than*] twenty letters, but y[*ou have not replied*.
- (3) *Please, obse*]rve with what my post (?) arrives, and in your fort (?) [*see*
- (4) *to it tha*]t you order that he be given his three shares. Those belonging to me [*take*
- (5) *them, and what*] they are bringing (?) you should buy, until I have set out [*and*] gone down. [*If you arrange*
- (6) *this in a*] good way, the Lord God [*will bestow*] on you a good reward for it. [*As for*
- (7) *the cattle market*] it will be delayed until the ninth of the month and before the tenth [*I could not*
- (8) *find out how much*] sheep there will be. And they buy more sluggishly, and the Lord God [*should assist us!*
- (9) *Regarding the clothes*] he should ensure that not any of them are worn (?), because they [*were displeased*
- (10) *in the last place that*] the clothing that had been sold they thr[*ew*] in our face, [*so that*
- (11) *for what there was to be*] sold there was (?) nobody. A hundred people of the town [*appeared*.
- (12) *I inquired about*] the thirty jugs (?) we shall buy, and there is no nard (?) available. [*It seems that something*
- (13) *of yours belongs to me*] like that of me to you, and I have a man, a specialist [*who has done the accounts*
- (14) *to make me*] know my profit and loss, and 9 \*Shabili (?) [*were counted to my credit*.
- (15) *Try to find something li*]ke sheep to buy on my behalf in order to [*even up the account!*
- (16) *In your precious letter*] you said thus : Rabbi, thirty [*pieces of those goods*
- (17) *were too late*] in coming and this is very detrimental. [*Will you, please,*
- (18) *give*] him [*an order to buy*] on my behalf 17 bales [*of cloth and send them*
- (19) *together with the cattle*] that you yourself bought and yourself sold and yourself dr[*ove to such and such a place*.
- (20) *In this affair,*] if profit should be the share for me, I [*ask you*
- (21) *to take care of it,*] but do not take any trouble about a fine account! [*Regarding so and so*
- (22) *I read the message that you*] sent, and he was not here, and the profit from the sheep thus [*wasn't*] correctly [*counted*.
- (23) *I hope that agent*] of yours arrives, as God wishes, and you personally will go to the commander (?) [*and that*
- (24) *regarding that matter*] you will say to the commander (?) : [*Bring*] me a harp [*and I have a girl!*



- (25) *If then*] you bring the harp, I shall teach the girl, and [*look*] how fast [*she will learn!*  
 (26) *What*] I [*wanted to*] find, I did not find, but from \*Nūrbak [*I got*] one ha[rp,  
 (27) *and that one*] I shall give to him, so that he shall teach \*Bagīdī. The black eunuch (?)  
 [*will take care of the rest.*  
 (28) *Be sure*] that I received your letter, but you said one thing better than that: [*If that is  
 arranged,*  
 (29) *then*] I shall work hard, so that the work that you ordered shall be done. [*As for your  
 fears*  
 (30) *regarding*] my mind, do not suffer any anxiety that [*you will*] hurt my mind! [*As for the  
 rest,*  
 (31) *know that*] I asked thus on behalf of \*Angusht Rōbāhah (?) saying [*that you must*  
 (32) *certainly go*] to Parvān and yourself make a request from that party regarding [*what they  
 owe you.*  
 (33) *Furthermore,*] in your letter you reported that on one hundred and fifty [*units there is  
 consent,*  
 (34) *and that the pay*]er of that money for the sheep [*accepts*] that [*price*] of y[*ours.*  
 (35) *As long as*] you have no come out [*from the to*]wn, from the side of [*so and so, expect  
 whatever!*  
 (36) *So equip yourself*] suitably with saddle and stirrups and straps! [*Thus I wish you*  
 (37) *the very best*] of everything from the Highest. Az-  
 (38) khar

手紙2：張・時の中國語譯

- (1) 以仁慈的神主之名、我、一位拉比、向主人 Nisī Čīlāg、向尊敬的  
 (2) Abū Sahak、向親愛的兄弟 Šavāpardar、向 Iēhak、向 Mōšak、並向 Harūn、  
 (3) 向 Xāšak、向小妹 Xudēnak、向你們所有人、年長的與年少的、致以十萬個問候。  
 (4) (祝你們) 平安健康。我寫(信)告訴你們：我、Hakīm、隨從和私生子 Šabīlī  
 (5) (都) 健康平安。家裏的僕人們因神主之力直到今天(也健康平安)。然後、  
 (6) 我要告訴兄弟 Šavāpardar：Nūrbak 來于闐了、他帶來了你們的信、我收到了。  
 (7) 我讀了你所寫的。你們所有人都身體健康平安。  
 (8) 我們在遠方十分高興。我們在神主前感恩。  
 (9) 然後、你要知道：我們非常順利地從地主那裏得到了羊。  
 (10) 我們吩咐(帶去)的禮物是正確的。因為我把香料帶進去了。他—在那女孩(身上)看到香料、  
 (11) 就命令 cyk'sy 道：“快把這個粟特人的羊交出來！”  
 (12) cyk'sy 和那(人)關係不好。但是地主生氣了。他沒有接受任何壞人的話。  
 (13) 他給了四個 mrnd。Šabīlī、Hakīm 和兩個奴僕於  
 (14) 六月十日去了山上。給地主的禮物是：一個闊口瓶、一卡菲茲刺山柑、五石  
 (15) dwgbyk、一石 dmybr、一斯塔特中國香料。給 syky 的禮物是：一份  
 (16) 絲綢、一份蠶絲。你們做得真好啊！地主女兒的 syky cyk'sy 名叫  
 (17) … ryq qr'q、(給他的) 禮物是：一份絲綢、一份糖、兩份 lymcw。給  
 (18) 掌管羊的判官的禮物是：一份 lyqyn、一份糖、一份 lymcw。給兩個  
 (19) 掌管數羊的 mrnd 的禮物是：lyqyn 各一、糖各一、以及兩份 lymcw。  
 (20) 給牧羊人的禮物是：bgdw、糖和 lymcw。他們去了山上。但是羊還

- (21) 沒到我們手上。他們答應：“我們會好好把羊給(你們的)。”在信中、  
 (22) 你寫道：“他們還想要關於羊的錢、我沒給。”你做得不好。  
 (23) 如果你收到這封信、而地主的女兒還沒出來。  
 (24) 關於她的羊無論她還想要多少錢、都命人給她、和她一起出來。  
 (25) 因為你是(我的)眼睛和光、對於地主來說、這個姑娘也是(眼睛和光)。好好感謝她。  
 (26) 如果你感謝她、並不會損失任何東西。我要寄非常多的信  
 (27) 給你們。但我不知道(這些信)會不會到你們那裏。五月十八日、  
 (28) Šabīlī 來了。二十五日、地主把兩個 qynq'k 送往(他)女兒那裏。  
 (29) 我通過那個 qynq'k 之手寄了三十封信  
 (30) 給你們。我寫了除喀什噶爾外所有城市的情況。  
 (31) 喀什噶爾的情況是這樣的：他們殺光了吐蕃人、綁了 bgdw。軍副使  
 (32) 帶着五百 mrnd、有的騎馬有的步行、去了喀什噶爾。軍副使之後、  
 (33) … nb'sy 爲了戰鬥、爲了和平和勝利派出了使者。我爲了戰鬥  
 (34) 付了100 ptkw 錢。你們曾建議我、爲了大衛、  
 (35) Nisī 的兒子和你們的外甥、也爲了戰鬥、爲了和平和勝利：  
 (36) “如果他來喀什噶爾了、不論他們要多少花銷、千萬不要  
 (37) 有所保留。”我這樣聽從了、大衛和  
 (38) 外甥也(也這樣聽從了。)

#### 注

- (1) 本稿は某教授の記念論文集に寄稿した“Some new interpretations of the two Judeo-Persian letters from Khotan”に加筆・修正したものである。  
 (2) ユダヤ・ペルシア語とは、ユダヤ教徒が使ったヘブライ文字表記の近世ペルシア語のことである。この言語およびその資料については、L. Paul, *A Grammar of Early Judaeo-Persian*, Wiesbaden 2013を参照せよ。  
 (3) É. de la Vaissière (tr. by J. Ward), *Sogdian traders*, Leiden/Boston 2005のいろいろな場所に記されている。筆者もかつてコータンのソグド人に関する史料をまとめたことがあるが (cf. *BSOAS* 60/3, 1997, pp.568-569)、de la Vaissière はそれを利用してきている。必ずしも明らかではないのは、コータン繪畫にソグド繪畫の影響があるとする M. Mode の説である。この問題は、エフタルの領土内に廣まった、繪畫の影響や流行の點から考える必要があるように思われる。  
 (4) それらについては Yoshida, *BSOAS* 60/3, 1997, p.569 および吉田豊「新出のソグド語資料について—新米書記の父への手紙から：西巖寺橋資料の紹介を兼ねて—」『京都大學文學部研究紀要』49, 2010, pp.1-24, esp. 5-6を参照せよ。  
 (5) Bi Bo and N. Sims-Williams, “Sogdian documents from Khotan, I: Four economic documents”, *JAOS* 30/4, 2010, pp.497-508。ここには別に1件のコータン出土のソグド語文書も紹介されている。そこには srtp'w 「薩寶」の語が見えるという (cf. *ibid.* p.498, n.7)。筆者も當該文書の寫眞を見る機会があったが、やや古風な文字で唐以前の時代の文書のように見えた。  
 (6) これは事態を簡素化しすぎているかもしれない。ソグド人には商胡と呼ばれる者や行客、別奏として商業活動するものがいた、cf. 荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝國』名古屋 2010, pp.344-378。なおこの時代にはこれらとは別に「突厥系ソグド人」もいた：森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』大阪、2010参照。  
 (7) Duan Qing, “*Bisā- and Hālaa-* in a new Chinese-Khotanese Bilingual Document”, *JIAAA* 3,

- 2008, pp.65-73, esp. p.66.
- (8) ちなみに構成要素の順序が逆の  $\beta ntkšyr$  という人名は、奇しくもコータン出土のソグド語文書に見られる。cf. Bi Bo and Sims-Williams, art. cit., p.500.
- (9) Cf. Yoshida, *BSOAS* 76/1, 2013, p.158.  $biša$  の意味が明らかになったことで、筆者の舊著(『コータン出土 8-9 世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』神戸 2006, p.53)におけるコータン文の譯文を訂正しておきたい。そこで引用された  $ustākajāñā biša chaupaṃ$  は、正しくは「屋悉貴村の叱半」と譯され、漢文本簡の「屋悉貴叱半」にぴったり對應する。そして  $chaupaṃ$  の原語が「叱半」であるとする筆者の説(『Sino-Iranica』『西南アジア研究』No. 48, 1998, pp.33-51, esp. 45)が正しかったことが明らかになる。
- (10) Prods Oktor Skjærvø, with contribution by Ursula Sims-Williams, *Khotanese manuscripts from Chinese Turkestan in the British Library. A complete catalogue with texts and translations*, London, The British Library, 2002, pp.132-133.
- (11) Cf. N. Sims-Williams, *Bactrian personal names*, Iranisches Personennamenbuch Band II/7, Vienna 2010, p.87, s.v. no. 249. なお Yoshida, *BSOAS* 76/1, 2013, p.158 も参照せよ。
- (12) 2014年6月21日關西大學で行われた東西學術研究所例會の席上、中國人民大學の畢波氏は、近年発見されたコータン出土の漢文文書にもソグド人の名前が見られることを報告した。
- (13) 吉田『前掲書』p.132参照。
- (14) この語とそれが見いだされる文書については Bi Bo and Sims-Williams, art. cit., pp.505-506 を参照せよ。さらに畢波「西域出土唐代文書中の「貫」」『北京大學學報(哲學社會科學版)』49/4, 2012, pp.129-136 も参照せよ。
- (15) サイズから判断して、唐の中央アジア支配時代の中國紙であろう。この點は、張・時も既に指摘している。cf. art. cit., p.75, n.3.
- (16) 手紙1の第1行目の  $zyzd kw dh 'y y'r b'šd$  “May the Lord God be a helper” (英譯は L. Paul, *A grammar of Early Judaeo-Persian*, Wiesbaden 2013, p.122 から) を手紙の書式に含まれると考えたようだ。しかし手紙2の冒頭部にはこの句は見えない。また、後續する部分にも手紙の書式らしい表現は見られない。
- (17) Y. Yoshida, “The Karabalgasun Inscription and the Khotanese documents”, in: D. Durkin-Meisterernst, Ch. Reck, and D. Weber (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit*, Wiesbaden 2009, pp.349-360.
- (18) 内容は、宗教関係と世俗文獻で、後者には公文書や經濟關係の文書が含まれているという。cf. Bi Bo and N. Sims-Williams, art. cit., p.497.
- (19) 別に注釋を添えない限り翻字と轉寫は張・時のそれを引用する。
- (20) 翻譯は特に注釋を添えない限り張・時の現代中國語譯に添っている。なお當該箇所が L. Paul, *A grammar of Early Judaeo-Persian*, Wiesbaden 2013 に引用されている場合は、Paul の英譯を添えることにする。この部分は “they killed the Tibetans severely” と譯されている。cf. *op. cit.*, pp.83, 149.
- (21) 彼の英譯は以下の通り: “and the vice commander went to Kashgar with 100 men be it on horseback or on foot”, cf. Paul, *op. cit.*, pp.105, 151, 161.
- (22) ちなみに、この  $mrnd$  と  $\gamma ulām$  の關係はよくわからないが、2つの語が現れる手紙2の13行目では、 $\gamma ulām$  が商人の護衛として同行していることも注目される。いわゆるチャカルがソグド商人の護衛になっていたことを示すからである。 $\gamma ulām$  とチャカルの關係については de la Vaissière, *Samarqand et Samarra: élites d'Asie centrale dans l'empire abbaside*. Paris 2007 を参照せよ。

- (23) カラバルガスン碑文の漢文版のテキストと翻譯・譯注は、筆者と森安孝夫が準備中である。このテキストはその研究から引用している。なおテキストは、森安孝夫(編)『シルクロードと世界史』大阪2003の巻末に収録されている。
- (24) Cf. Y. Yoshida, “On the taxation system of pre-Islamic Khotan”, in: *Acta Asiatica* 94, 2008, pp.95-126, esp. p.112.
- (25)  $wsl'm wkyzm$  を張・時は「和平勝利」と譯す。ただアラビア語の  $hazimat$  は「勝利」というより「敗走」というほどの意味であり、「和平と(敗北による)撤退」を意味しているのではないだろうか。アラビア語の單語の意味については同僚の井谷鋼造教授の教示を受けた。記して謝意を表す。
- (26) コータンは790年以降796年までにはチベットの支配下に入っていたらしい、吉田豊『上掲書』p.73参照。
- (27) この語については D. Durkin-Meisterernst, *Dictionary of Manichaean Middle Persian and Parthian*, Turnhout 2004, p.161b を参照せよ。なお「副使」の「副」はこの場合は去聲で、\* $pjəu$  と復元されている、cf. B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa*, Stockholm 1957.
- (28) 司馬という稱號も知られているが、その稱號に副使が添えられることは考えられないという。(荒川正晴教授および森安孝夫教授から教示を得た。)
- (29) 畢波「和田新發現漢語、胡語文書所見“筋脚”考」『“黃文弼與中瑞西北科學考查團”國際學術研討會論文集』烏魯木齊 2013, pp.366-374参照。
- (30) Cf. F. Steingass, *A comprehensive Persian-English dictionary*, London 1892, reprint Beirut 1970, p.244b.
- (31) N. Sims-Williams and J. Hamilton, *Documents turco-sogdien du IX<sup>e</sup>-X<sup>e</sup> siècle de Touenhouang*, London 1990, pp.34-35.
- (32) Paul はこの部分を “and he ordered (to) Jixāši: ‘quickly give this Sogdian the sheep!’” と譯している (cf. *op. cit.*, pp.161, 162, 164)。
- (33) 在證されるのは複數形の  $cygš'n$  であるが、單數形の  $cygšyy$  が別の文獻に何度か現れているので問題は無い (cf. Durkin-Meisterernst, *op. cit.*, p.132a)。
- (34) Cf. Henning, “Mitteliranisch”, in: *Handbuch der Orientalistik*, 1. Abt., IV. Bd.: Iranistik, 1. Abschnitt: Linguistik, Leiden 1958, pp.20-130, esp. pp.79-80.
- (35) 14行目の  $gwlyq$  「瓶」もソグド語の單語と考えられる (cf. 張・時, p.93)。また上で論じた  $šmsy$  もいったんソグド語に入った借用語をさらに借用したのかもしれない。
- (36) Cf. Bo Utas, *From Old to New Persian*, Wiesbaden 2013, pp.40-41.
- (37) 森安孝夫『シルクロードと唐帝國』東京2007, pp.251-253から引用する。ただし縦書きを横書きに改めた際、漢數字をアラビア數字に改めた。吳震の研究は「唐代絲綢之路與胡奴婢買賣」『1994年敦煌學國際研討會文集』蘭州 2000, pp.128-154である。
- (38) むろん宦官自身も商品であった可能性が高い。de la Vaissière は、手紙1をユダヤ商人である  $Rādhānaites$  と關連づけているが (*op. cit.*, pp.184-186)、 $Rādhānaites$  についての Ibn Khurdādhbih の記録には、彼らは女奴隸以外に宦官も賣買していたとある。de la Vaissière の解釋については影山悦子博士の教示を得た。
- (39) この構文については Sims-Williams *apud* Sundermann, “Probleme der Interpretation manichäisch-soghdischer Briefe”, in: J. Harmatta (ed.), *From Hecataeus to al-Huwārizmī*, Budapest 1984, pp.289-316, esp. p.296, n.20, および吉田豊「ソグド語の敬語について」『中央アジア古文獻の言語學的・文獻學的研究』(Contribution to the Studies of Eurasian Languages 10), 2006, pp.81-94, 特にpp.82-83を参照せよ。

- (40) Paul (*op. cit.*, p.98) は “order to give it (to him?)” と譯している。
- (41) Paul (*op. cit.*, pp.69, 124) は “order a request to be made” と譯している。
- (42) ここの 's については Sh. Shaked, “Classification of linguistic features in Early Judeo-Persian”, in: W. Sundermann, A. Hintze and F. de Blois (eds.), *Exegisti monumenta. Festschrift in honour of Nicholas Sims-Williams*, Wiesbaden 2009, pp.449-461, esp. p.453, n.16 を参照。Paul (*op. cit.*, p.98) は “order to give it to her” と譯している。
- (43) Judeo-Persian についての Shaked の次のような言葉も想起される: “None of these texts [Judeo-Persian texts のこと (吉田)] can be described as a vernacular, for the writers seem to aim at presenting a literary form of Persian”, cf. art. cit., p.449. この当時ホラーサーンやトランスオクシアナでは、ペルシア語は母語を異にする異民族間の共通言語になっていたという指摘もある (cf. B. Utas, “A multiethnic origin of New Persian?”, in: L. Johanson et al. (eds.), *Turkic-Iranian contact areas*, Wiesbaden 2006, pp.241-252)。
- (44) Paul, *op. cit.*, pp.161, 162, 164 参照。
- (45) V. Hansen, *The Silk Road. A new history*, Oxford 2012, pp.217-19 参照。張と時も、dihgān は、ペルシア人をソグド人と見誤ったか、当時コータンでは「ソグド人」は、商人の代名詞のようなものであったのだろうとしている (cf. art. cit., p.92)。
- (46) 敦煌出土文獻にはヘブライ語で書かれた祈禱文書の断片が存在していることも想起される。cf. Ph. Berger and M. Schwab, “Le plus ancien manuscrit hébreu”, *JA*, sér. 11, 1913, t. II, pp.139-175.
- (47) 今は假にソグド文字を横書きだとした上で「天地が逆に」と表現した。ただし縦書きでも上下逆さまに書かれていることは同じである。ソグド文字の縦書きがいつ始まったかについては Y. Yoshida, “When did Sogdians Begin to write vertically?”, in: *Tokyo University Linguistic Papers 33, Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto*, 2013, pp.375-394 を参照せよ。近くこれの日本語版が『アジア遊學』誌に掲載される予定である。
- (48) ちなみに Bi Bo and Sims-Williams (art. cit., pp.504-505) のテキストと譯は以下の通りである:
- 1a ](p)γyzym(?) 'sty 1LPw ptk(w)k pny s'δ(?) pny pr  
2a ] pc.....(?) ZY šyr'krtyh sky(?) zy'mt k'n  
“ ... we are ready(?). There are 1000 strings of pny ... pny for ... and piety ... he will spend ...”
- ただし著者たちはこの部分の意味がとれなかったとしている。この機会に Bi Bo and Sims-Williams's (ibid.) が ctβ'r ny's... (text no. 4, verso l.10) と読む語は ctβ'r ywxt 「4つのルビー」と読むことができることも指摘しておきたい。ソグドの商人たちは、極めて高価な品物も扱っていたようである。
- (49) 文字通りに原文を譯せば「私は戦争の爲に何かを與えた、100貫の錢の資金によって」とでもなるであろう。
- (50) ソグド地域のペルシア語化については Yoshida, “Sogdian”, in: G. Windfuhr (ed.), *The Iranian languages*, London and New York, 2009, pp.279-335, esp. pp.329-330 を参照せよ。
- (51) Cf. F. Grenet and E. de la Vaissière, “The last days of Panjikent”, *Silk Road Art and Archaeology* 8, 2002, pp.178, 192.
- (52) これらの物品のうち、dwgbyk, dmbyr, lymcw, lyqyn, bgdw の意味は分かっていない。
- (53) 3. syky cyk'sy 以下の人々への贈り物を張・時の翻譯によって示しておこう: 3. 「一份絲綢、一份糖、兩份 lymcw」; 4. 「一份 lyqyn、一份糖、一份 lymcw」; 5. 「lyqyn各一、糖各

- 一、以及兩份 lymcw」; 6. 「bgdw、糖和 lymcw」。
- (54) 石蜜については E. Shafer, *The golden peaches of Samarkand*, Berkeley 1963, pp.152-154 を参照せよ。Hansen (*op. cit.*, p.101) は muscado (sic) sugar と英譯している。
- (55) Hedin 15, 16の判官に関しては H. Bailey, *Khotanese texts IV*, Cambridge 1961, p.108 を参照せよ。コータン語文書の年代比定については Yoshida, “The Karabalgasun...” (上記注17) を参照せよ。
- (56) 破損部に關して、張・時のテキストを少し改めた。
- (57) 張・時は öün tō (i.e. cwn tw) と復元するが、破損した部分はずかて5字分はない。また26行目の初頭には、張・時のように [ʿg]r と復元せず、[wg]r を補った。新しい文の始まりは接續詞 w- でマークされることが多いからである。
- (58) 「感謝するだけなら一錢の損にもなりません、只です」というほどの意味であろう。
- (59) この dihgān が確かにコータン王を指すのであれば、手紙2の年代から考えて Viša' Vāham か彼の後繼者と目される Viša' Kīrta が考えられる。ただ Viša' Vāham は800年頃には極めて老齢であったはずで、その娘が目に入れても痛くないほどだったとは考えにくいように思う。コータンの王統については P. O. Skjærvø et al., *Khotanese manuscripts from Chinese Turkestan in the British Library*, London 2002, p.lxvii を参照せよ。なお Viša' Vāham 登位年は767年であることが確定した (cf. Yoshida, “The Karabalgasun...”)。彼はそれ以前、756年に兄の尉遲勝がコータンを去って以降は攝政をしていた。
- (60) 商人から賄賂をもらうこの羊飼いは、單なる羊飼いは考えにくく、王領などで飼育されていた特別の羊を管理する役人であったのではないかと思う。コータン出土の漢文文書には「羊戸」という表現が見えるが、それにあたるだろうか (cf. 張廣達・榮新江『于闐史叢考 (増訂本)』北京 2008, p.269)。
- (61) このリストに關しては W. B. Henning, “Argi and the “Tokharians””, *BSOS* 9/3, 1938, pp.545-571, esp. p.566 参照。(丸括弧) 内の數字は Mahrnāmag の行數。
- (62) 彼の名前は bg t'ys'ngwn syrtwš yg'n'p' で、「大將軍」と「節度使」の要素を含む。「節度使」については下の注釋を参照せよ。本来 \*syrtwšyy であったはずだが、行末で短縮された綴りで現れているようだ。
- (63) これは筆者の比定である。'wewreyk の地名比定については N. Sims-Williams and D. Durkin-Meisterernst, *Dictionary of Manichaean Sogdian and Bactrian*, Turnhout 2012, p.34 も参照。
- (64) この稱號は漢語の「節度使」に由來する (cf. Yoshida, “Sogdian Miscellany III”, in: R. E. Emmerick and D. Weber (eds.) *Corolla Iranica. Papers in honour of Prof. Dr. David Neil MacKenzie on the occasion of his 65th birthday on April 8th, 1991*, Frankfurt am Main/Bern/New York/Paris 1991, pp.237-242, esp. p.242, n.19)。
- (65) Cf. Bo Utas, “The Jewish-Persian fragment from Dandān-Uiliq”, *Orientalia Suecana*, 17, 1968, pp.123-136, esp. p.135.
- (66) -c は、地名から形容詞を派生するソグド語の接尾辭である。
- (67) 『新唐書』(中華書局標點本) p.1150 参照。
- (68) これは、M. Macuch 教授の教示による解釋であるという (cf. 張・時, art. cit., p.97)。英譯は Paul, *op. cit.*, pp.133, 143, 170 を参照せよ: “If he has come to Kashghar, however much expense they require, do not keep anything back from us.”
- (69) もしもこの手紙が、漢軍がまだコータンにいたときに書かれたのであれば、チベット軍と漢軍の戦鬪を想定すべきかもしれない。

(70) 京都大学人文科学研究所の稲葉稜教授はこの可能性を指摘して下さった。ちなみにソグド語にはユダヤ教会を意味する *cxwδ βγδ'ny* という語が存在しており、例えばサマルカンド等のような大都市にはユダヤ教会やゲッターが存在した可能性は高い。

(71) ハザール帝国との関連は容易に想起される (cf. de la Vaissière, “*Les marchands d'Asie centrale dans l'empire khazar*”, in: M. Kazansky et al. (eds.), *Les centres proto-urbains russes entre Scandinavie, Byzance et Orient*, Paris 2000, pp.367-378)。

## 後記

本稿は2年以上以前に提出したもので、このたびようやく出版の運びとなったことは慶賀すべきことである。ただこの間にもいくつかの関連する研究が発表され、その際に本稿での筆者の指摘が利用される機会がなかったことは残念であった。この間に出版された、いくつかの関連する研究を後記として追加して、いくらかでも筆者の論文をアップデートしておきたい。

本稿の内容の一部は、2014年8月13-14日に、中華人民共和国銀川市で開催された国際学会「粟特人在中国：考古發現與出土文獻的新印證」において口頭発表したのが、そのプロシーディングが公刊され、そこに口頭発表の内容の中国語版が掲載されている：「于闐的粟特人一對和田出土的兩件猶太波斯語信札的一些新見解」(榮新江・羅豐主編『粟特人在中国：考古發現與出土文獻的新印證』下冊 北京2016, pp.621-629)。

その同じ学会で張湛は「粟特商人的接班人?—管窺絲綢路上的伊朗猶太商人」と題する発表を行ったが、その内容も『上掲書』pp.661-672に収録されている。筆者の口頭発表を参考にして、学会当日の口頭発表とは内容を一部変更している。ここではこの新しい論考を参考にする事はできなかったが、本稿の内容を変えなければならないような変更は見つからなかった。

本稿全体に関わる論考として G. Lazard, “La dialectologie du persan préclassique à la lumière des nouvelles données judéo-persanes”, *Studia Iranica* 43/1, 2014, pp.83-97が発表された。この論文の89-90頁に、本稿で扱った手紙の言語の特徴について、それが非常に早い時期の近世ペルシア語を示すと述べられ、いくつかの言語特徴が指摘されている。しかし本稿で問題にした点は觸れられていない。

p.263 p.1: エンデレのカローシュティー文書の年代をめぐっては、É. de la Vaissière, “Silk, Buddhism and early Khotanese chronology: A note on the Prophecy of the Li Country”, *Bulletin of the Asia Institute* 24, 2010 [2014], pp.85-87, esp. p.87, n.14を参照せよ。

p.276 p.15, prw'n に関して: ちなみにすぐ下で言及する新たに発表されたコータン出土のソグド語の手紙には、'zw kw prw'n s'r xrtym 「私は prw'n に行きました」という文言が見える。この手紙を発表した Bi Bo and Sims-Williams もたたく prw'n をアクスに比定しているが、ユダヤ・ペルシア語の手紙1にも prw'n が現れていることには気づいていない。

p.279 p.18, n.1: この英語論文は寄稿後3年を経た今も出版されていない。

p.279 p.18, n.5: コータン新出のソグド語文書に関する Sims-Williams と Bi Bo の研究の続編もこの間に出版された: Bi Bo and Sims-Williams, “Sogdian documents from Khotan, II: Letters and miscellaneous fragments”, *JAOS* 135/2, 2015, pp.261-274。ここには手紙類が含まれているが、上で引用した prw'n についての議論は269頁にある。また Bi Bo and Sims-Williams 2010の中国語版も近年発表された: 「和田出土粟特語文獻中的四件經濟文書」『西域文史』vol. 10, 2016, pp.188-200。なおこの中国語版には、英語版に対して筆者が個人的に提供した修正案も採用されているので参照されたい。

同様に、srtp'w を含む新出文書も、上述した銀川の学会の論文集に収録された段晴の論文「粟特商隊到于闐—BH4-135之于闐文書解讀」(『上掲書』pp.96-115)に掲載されている。驚

いたことに、そこにはかつて筆者が段晴教授からの非公式な求めに應じて解讀した、コータン語の帳簿を包んでいた封筒の外側に書かれた1行のソグド語が、筆者のメールと共に引用されている。ただ今回収録されている寫眞は、そのおりに送って頂いた寫眞と比べると、紙の表面の皺をのばして撮影されており、読みを一部改善できるので、それを示しておきたい: (t)βty βyy'n [ZKn] srtp'w 'kw't'kk 「薩寶の əkūtakk の息子で Vaghyān が封印した (テキストの中の [ZKn] は封泥によって隠れていると考えられる語)」。この文書については下記も参照せよ。

p.281 p.20, n.31: この間に Sims-Williams and Hamilton 1990の改訂英語版が出版されている: *Turco-Sogdian documents from 9th-10th century Dunhuang*, London 2015。

p.281 p.21, n.39: 中世ペルシア語にも類似の用法は在証されているようなので (P. O. Skjærvø, “Middle Western Iranian”, in: G. Windfuhr (ed.), *The Iranian languages*, London / New York, 2009, pp.196-278, esp. p.265)、必ずしもソグド語の影響によるものではないかもしれない。

p.282 p.21, n.47: この間に日本語版は出版された: 「ソグド文字の縦書きは何時始まったか」森部豊(編)『ソグド人と東ユーラシアの文化交流』(アジア遊學)東京 勉誠出版 2014, pp.15-29。

本稿の冒頭でも、コータンにおけるソグド商人の役割について考察したが、上で言及した段晴の論文で発表された文書は、シルクロードにおけるソグド商人の役割を考える上でも、非常に重要な材料を提供してくれる。この文書は、コータン語で書かれた寺院會計帳簿を封入したもので、封泥で封印した上に、封印したソグド商人の名前が書かれている。コータン語部分を解讀した段晴は7世紀後半の文書だとしているが、ソグド文字の書體はその印象と矛盾しない。あるいはもう少し古いかもしれない。いずれにしても唐の支配が及ぶ以前のものであろう。

この新発見の文書が示す特異な状況を説明するのは容易ではない。筆者はソグド商人がコータンの寺院の會計に參與していた、あるいは寺の財産の運用を委託されていたことを示すものではないかと推測する。実際7-8世紀のクチャでは、寺院の財産の運用をソグド人が行っていたことを示唆する事例が知られているようだ: 慶昭蓉「庫車出土文書所見粟特佛教徒」『西域研究』2012/2, pp.54-75。なお、段晴は本文書をめぐる事態の背景として、筆者とは全く異なるシナリオを考えており、この問題は今後さらに考察を深めていかなければならない。

東洋文庫論叢 第80

# 敦煌・吐魯番文書の世界とその時代

土肥 義和 編  
氣賀澤保規

公益財団法人 東洋文庫

中央アジア研究班

2017年3月



TOYO BUNKO PUBLICATIONS,  
Series A, No.80

*Documents from Dunhuang and Turfan:  
Their World and Time*

Edited by DOHI Yoshikazu and KEGASAWA Yasunori

Toyo Bunko  
Tokyo 2017

序——論集の發刊に寄せて

東洋文庫の内陸アジア研究班（内陸アジア出土古文獻研究會）は2009年3月、多くの方々の協力を得て『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』（土肥義和編）を刊行し、廣く内外の評価を得ることができた。その実績と自信をもって、次の5年という研究期間が終了となる2015年を目途に、また研究成果としての論文集を刊行したい、そう話し合いがなされたのは、忘れもしない東日本大震災に見舞われた翌日、2011年3月12日であった。当日、震災の餘震による大きな揺れが頻發し、電氣も消え、街中の人通りが途絶えたなか、東洋文庫の7階會議室には6名ほどの顔が揃い、それぞれ震災の深刻な状態を心配しながら今後の計畫について意見交換した。私はといえば、震災のため帰宅できずに一夜を過ごした大學研究室から會議の場に赴いた。本論集のための第一歩はここから始まった。

それから2年間、まず懸案であった前論集の「修訂版」を汲古書院と共同出版する準備を進め、その間、本論集の執筆者の人選や方向づけなどを詰め、それらがすべて終わった2013年4月に關係各位に執筆依頼状を發送し、いよいよ本論集の計畫が始動することになった。この依頼にたいし、多くの方々から気持ちよく執筆を承諾いただけたことは本當に幸いであった。周知のごとく、現今の大學を取り巻く状況は大變厳しく、教員たちは教育と日々の業務に忙殺され、自身の研究に割ける時間は制約され、まして敦煌や吐魯番を専門とする研究者が減少傾向にあるなかで、どこまで執筆に協力いただけるかを心配したからである。

本論集の刊行を進めるに当たり、私どもは一つの試みを計畫した。單に原稿を出し合うだけでなく、それぞれ一度は研究會の場で報告し、お互いに認識を深め合うとともに、議論や助言を論文に反映させられないかというものである。それができればわれわれの論集は、單なる論文の寄せ集めではない意味をもち、そうした積み重ねが當該分野の質的向上と裾野の廣がりにつながるはずとの期待もあった。だがその計畫は實際には容易なことではなかった。執筆を引き受けていただいた方々がすべて東京・關東周邊にいるのではなく、しかも上述のように誰もが大変忙しく、研究もそのテーマだけに集中しているわけではない。毎月の研究會で報告していく形式は早くに頓挫を餘儀なくされた。そこで代わって、長期の休みに集中的に報告し合う形はとれないだろうかと模索し、2014年の夏、参加が可能な範圍でそれを実施した。2日間にわたって行ったその試みでは、出席者は10名ほどになり、それぞれの考えているところが確認でき、論文執筆への一定の弾みになった。

しかしそうした試みにもかかわらず、最初に豫定していた2015年3月の刊行は難しくなり、結局2年遅れで、ここに刊行を迎えることとなった。期限通り提出いただいた方々には多大なご迷惑をおかけしたことに、この場を借りてお詫び申し上げたい。

また當初執筆を豫定しながら、諸般の事情によりこの場に間に合わなかった関係者が多くいる。かく申す私もその一人で、諸事に紛れあと一步のところまで完成に至らなかったことを恥じている。このことの埋め合わせは後日きちんと果たす所存である。

さて、提出いただいた原稿は全部で20本に上った。そのうちの1本は「史料紹介」として、私どもの研究班が進めてきた「サンクトペテルブルグ東洋學研究所所蔵内陸アジア出土漢語文獻マイクロフィルム目録のデータベース化」計畫にもとづく漢語文獻の整理作業のうちの、ほぼ整理が完了した非佛教漢語文書の全容を報告するものである。執筆は整理の中心を擔ってきた吉田章人氏(新潟大學)にお願いした。それ以外の19本は、一々内容を紹介する餘裕はないが、表題から見ていずれも興味深く、力作が揃っている。そこで前論集に倣って、それらを大きく「I制度・行政文書」、「II地域と社會」、「III文化と思想」の3部に分類し、各部のなかでは年代順、時代順を意識して配列した。この分類の仕方にはやや異論もあるだろうが、各論文の大きな位置づけのためとご了解願いたい。

執筆者のなかで、4人の中國人研究者がいる。そのうち王素氏(中國故宮博物院)は以前より私ども研究班と交流があり、吐魯番文書の研究や資料提供などで支援をいただいていた。他の劉安志(武漢大學)、朱玉麒(北京大學)、余欣(復旦大學)の3氏は、京都(京都大學)に来ていて東京に出られた機会に東洋文庫で講演をいただき、それを機縁に執筆をお願いすることになった。4氏の原稿はそれぞれ密度が濃く、本論集に重量感を與えるものであるが、ただしそれぞれ内容に難しいところも多く、著者と確認のやり取りも必要になり、翻譯には相當苦勞した。翻譯にあたっていただいた若手研究者には感謝申し上げたい。當初私どもはこの翻譯文を原文(中文)と並べて出すことを考えたが、スペースの関係からそれは断念した。外國語論文の翻譯には人を得る必要があり、その翻譯の業績は正當に評價されてよいと改めて認識した次第である。

3部に分類した構成では、Iが7名、IIが6名、IIIが6名とほぼうまく均分できたが、これは無理にそう振り分けたのではない。本論集で扱うのは、上は五胡・高昌國期から下はモンゴル期の吐魯番まで、地域的には西はコータンから日本にまでおよび、中心は唐代となる。このことは、本論集の人選が全體にバランスがとれ、多様な角度から時代や地域を考察しようとする姿勢の表れと評價されるかもしれないが、しかしこうしたなかで課題も見えてくる。何よりも佛教(史)の面からの考察の少なさである。本論集では、張娜麗氏(筑波大學)が佛教文獻を取り上げられただけで、敦煌・吐魯番文書で中心を占める佛教の問題は中心的テーマになっていない。これが當該分野の現状の反映でもあるが、今後は少しでもこの現状を変えていく取り組みが求められることになる。

また年代構成でいえば、若手を代表して赤木崇敏氏(四國學院大學)が、中堅世代では松井太氏(大阪大學)や岩本篤志氏(立正大學)が、それぞれ手堅い考察を出さ

れているが、全體としてはやはりこれだけでは寂しい。中堅・若手にはもっとこの領域に踏み出してもらえることを期待している。なお幸いなことに、今回も日本史(古代史)の側から二人の方に協力いただけた。古瀬奈津子氏(お茶の水女子大學)と丸山裕美子氏(愛知縣立大學)である。中國本土を挟んで東の日本と西の敦煌の位置関係、また敦煌文書や吐魯番文書に残された制度や法律、佛典や文化などのナマの一次史料の存在から、日本史研究に関わる様々な素材を引き出すことができる。これからも多くの方々が關與されることを願いたい。

敦煌や吐魯番というと、私たちはただちに石窟や壁畫の存在を意識するが、従来から私どもの企畫では佛教美術や考古方面は外されてきた。本論集でも漢語文獻を柱にして従来の方針は踏襲されたが、ほつほつそうした断絶状態は修正されてもよい時期に差しかかっているように思われる。文書史料を通して私たちが見つめようとする先にあるのは、如何にしてその時代像、地域社會像、そこに生きた人々の姿を浮き彫りにするか、という課題である。その課題は美術史や考古學でも共有する。本論集の多彩な研究テーマを前にして、さらに一步進んだ敦煌・吐魯番研究の可能性を考えた次第である。

私ども内陸アジア研究班(内陸アジア出土古文獻研究會)では、今後も敦煌や吐魯番など中國西北地域から發見された漢語文獻を主體に、さらに現地に残る石窟文化や墳墓などに關わる文物、石刻資料などを取り込んで、特色ある歴史研究を着實に進め、當該分野研究の中心としての役割を果たしていきたいと願っている。その上で、次の論集や別の新たな成果も世に聞きたいと考えている。大方の積極的な關與と支援をお願い申し上げる。

なお本書の編集に当たっては、各論者の表記を尊重し、あえて全體の統一をとらなかった。ただし漢字は全體を通して舊字體(繁體字)を採用したが、文書史料の録文では原文の俗字は一部そのまま残したところがある。「爾」に對する「尔」といった例である。圖版(文書寫眞)については、カラー・モノクロともに編集の都合上、本書の巻末に一括したが、王素論文だけは行論の都合にあわせ、すべてモノクロにして本文中に掲載した。これら編集上の體裁については、ご了解いただきたい。また、圖版の轉載を許諾して下さった關係機關には謝意を表す。

最後に、本論集の刊行は多くの方々の協力のもとで實現した。なかでも編集の責を擔っていただいた中村威也氏(跡見學園女子大學、東洋文庫囑託職員)、その下で編集業務を補佐した速水大氏(國學院大學、東洋文庫臨時職員)、進行全體を背後から支えていただいた研究部部長代理・主幹研究員の會谷佳光氏に研究部事務の山村義照氏、これら各位には心から感謝申し上げる。

編者 氣賀澤 保規 識

# 敦煌・吐魯番文書の世界とその時代

## 目次

序 .....	氣賀澤保規..... i
目次 .....	v
英文目次 .....	vii

### I 制度・行政文書

伊藤敏雄	樓蘭出土漢文文字資料中の簿籍と公文書について ——残紙の簿籍と公文書を中心に——.....1
町田隆吉	河西出土五胡時代「板」(官吏辭令書)小攷.....21
關尾史郎	「賞簿」の周邊——北涼時代の簿籍と税制——.....39
王素 (河内桂譯)	高昌王令形式總論.....59
荒川正晴	通行證としての公驗と牒式文書.....101
土肥義和	唐代における均田法施行の史料雜抄.....115
劉安志 (速水大譯)	唐代解文初探——敦煌吐魯番文書を中心に——.....123

### II 地域と社會

妹尾達彦	唐長安の都市核と進奏院 ——進奏院狀(P3547・S1156)をてがかりに——.....157
古瀬奈津子	書儀・往來物を通じてみた日唐親族の比較.....187
石田勇作	9～10世紀敦煌地域社會と組織の一斷面 ——P3249v文書を手掛かりに——.....201
赤木崇敏	曹氏歸義軍節度使系譜攷 ——2つの家系から見た10～11世紀の敦煌史——.....237
吉田豊	コータンのユダヤ・ソグド商人?.....263
松井太	トゥルファン=ウイグル人社會の連保組織.....287

### III 文化と思想

- 朱 玉 麒 トルファン文書にみえる漢文文學史料……………311  
(西村陽子 譯)
- 張 娜 麗 玄奘の譯場と玄應の行實  
——敦煌・吐魯番文獻と日本古寫經の傳えるもの——……………331
- 伊藤美重子 敦煌寫本「醜女緣起」の依據する經典の再検討  
——『賢愚經』と『雜寶藏經』の醜女説話をめぐって——……………373
- 岩本篤志 敦煌文獻と傳存文獻の間  
——唐代の醫藥書『新修本草』と『千金方』を中心として——  
……………389
- 丸山裕美子 磯部武男氏所藏「朋友書儀」斷簡について (再論)  
——「敦煌秘笈」及び中村不折舊藏吐魯番寫本「朋友書儀」  
との關係をめぐって——……………399
- 余 欣 中古時期における瑞應圖書の源流  
(山口正晃 譯) ——敦煌文獻と日本寫本の總合考察——……………413

### 史料紹介

- 吉田章人 東洋文庫における IOM RAS 所藏非佛教漢語文書の  
整理と考察……………445
- 圖版一覽……………475
- 執筆者一覽……………494

## Documents from Dunhuang and Turfan: Their World and Time

- Preface……………KEGASAWA Yasunori…… i  
Table of Contents…………… v

### I Administrative System and Related Documents

- ITO Toshio  
On the Registers and the Official Documents Found in Chinese Materials  
Unearthed in Loulan: Focusing on the Fragments of Registers and Official  
Documents……………1
- MACHIDA Takayoshi  
Notes on Wuhu-era *Bans* (Document of Official Appointments) Unearthed  
in Hexi……………21
- SEKIO Shiro  
The Facts Surrounding *Zibu*: Registers and the Fiscal System of the Beiliang  
Era……………39
- WANG Su (Translation by KOCHI Katsura)  
General Study on the Formality of the Royal Edicts of Gaochang Kingdom……………59
- ARAKAWA Masaharu  
*Gongyan* and *Die*-style Documents: Focusing on Their Nature as Permissions  
of Passage……………101
- DOHI Yoshikazu  
An Essay on a Material Concerning the Operation of the Equal Field  
System during the Tang Era……………115
- LIU Anzhi (Translation by HAYAMI Dai)  
Preliminary Study on Tang Era *Jie*-Documents: Focusing on the Dunhuang  
and Turfan Documents……………123

### II Region and Society

- SEO Tatsuhiko  
The Urban Core Area of Tang-era Chang'an and *Jinqaoyuan*: Through the  
Examination of Reports from *Jinqaoyuan* (P3547 and S1156)……………157
- FURUSE Natsuko  
A Comparative Study of the Concept and Reality of Kinship in Japan and  
Tang China: Based on the Research of *Shuyi* and *Oraimono*……………187